

2013年6月24日 「死生決断の時は今」 石川祐司教会長

今日は、石川教会長の説教でした。以下に、訓読のみ言を掲載いたします。

<訓読のみ言>

『天聖經』

礼節と儀式 第1章 神様に対して侍る礼法

3) 眞の父母様が神様に仕える法 ② 孝子の道

先生は、おなかがすいて疲れて倒れることがあったとしても、どうすれば神様が心配するその道を私が先立って行くか、背負うことのできる十字架の道があるならばどのようにその道を行こうかと考えました。

しかし皆さんは、このような道を行こうと準備してはいません。今日皆さんは、侍ることによって救われるということを知りながらも、ずうずうしく眺めています。そのような心でとどまっただけではいけません。(13-233, 1964.3.22)

先生が何をされるか分からなければ眠れないので、夜中にでも飛んできて尋ねていくことのできる、そのような生活をしなければなりません。それで、「侍ることによって救われる」と言いました。先生は神様に対して、いつもそのように生きています。瞬時も気を抜けません。(21-71, 1968.9.9)

皆さんは侍義時代、すなわち侍る生活において正確な中心をもっていかなければなりません。神様に侍るには法度があります。その法度に背く時には、神様はとても怒られるお方です。子供を愛する父母が子供の言葉の一言に、胸に釘を打たれたり抜かれたりするのと同じように、神様も人間を愛していらっしゃるがゆえに怒りが多いのです。ややもすると、間違えて神様から怒りを買うことになります。ですから先生も、いつも先生なりに神様を喜ばせてあげようとしています。(17-287, 1967.2.15)

皆さんも、皆さんを思ってくれる人を訪ねていくでしょう。神様も同じです。その神様を占領できる道は、誰よりも神様を思い、神様のために奉仕しようとする道です。その人を中心として神様は訪ねてこられるのです。(128-172, 1983.6.12)

先生は、神様の前に、綿入りのズボンがびしょぬれになるほど祈ったことが何回あったか知れず、ナイフを持ち、おなかにあてて誓ったことが何回あったか知れず、死の峠を越えながら、心に固く決意したことが何千万回あったか分かりません。(19-19, 1967.11.5)

人間において神様を愛するのが第1の戒めですが、愛するのに死ぬほど愛すべきですか、一時的に愛すべきですか。皆さんは、神様を死ぬほど愛したいですか、死ぬほど愛したくないですか。雷に打たれて死ぬとしても愛さなければいけません。神様を死ぬほど愛さなければならぬというのです。死ぬほど愛さなければならぬなら、死ぬ前までは、できないことがないというのです。(37-25, 1970.12.22)